

回想五十年

原田 健

私は実は九月下旬、満五十年の公僕生活を卒えて退官したばかりのところに、回想五十年を書けとのお勧めを受けましたので、永年ご無沙汰している辱知諸賢に対するご挨拶のつもりでいささか思い出を綴ることにしました。もっとも私の同志社在学は明治の最後の五年間で、五十七年前の普通学校の出身であります。

当時の同志社は文部省が基督教主義の学校を庄迫した名残りをとどめて「中学」と呼ぶことすら許されなかった時代ですが、忘れることができない先生方は、教頭波多野先生をはじめ秦、三輪、飯塚、加藤、福井、和田、塩瀬、会沢の諸先生で、それに外国人教師はグローバー、ロムバード、ダンニング、シャイベリーの諸先生でいずれも中学にはもったいないくらい立派な先生方で、それといふのもその大部分が母校出身者で、薄給に甘んじて母校のために献身的に尽しておられた方々でありましたので、校祖を中心とした一大同志社ファミリーの観があり、官学はもちろんのこと、私学でも珍しい独特の存在であったと思われました。

生徒の方も単に地域ばかりではなく全国から集まった校友の子弟も多く、したがって寮生活が学生々活の中心でありました。それでも私も自宅から通学せずに特に入寮を願ひ出て楽しい共同生活を共に

したことは実に幸いであります。

私は二年生の頃から野球部に属し、毎日の練習には相当しごかれたものです。当時、北脇投手のキャプテンの下に阿部前早稲田大学総長が名遊撃手として活躍されたことは当時の人々は忘れていないと思います。当時は土曜日が肉体的休息日で日曜日は精神的安息日とされておりましたので、日曜日に野球試合をすることを厳禁されておりましたから、他校との対校試合に困ったこともありました。

当時私の亡父が同志社長として校長を兼ねておりましたので、実は私は在学中五年間はどこへ行っても校長の倅せがれとして衆目の中心となっていたような気がして、とても窮屈で一日も気楽に暮したことがなかったのです。実を申せば、入学前に既にそれを顧慮して他の学校にやってくれと父に頼んだのですが、どうしても許されなかったのです。そこで卒業するや、今度こそはよそに逃げさせてくれと頑強に頼み込んだので、さすがの父も許さざるを得ず、私は官学に向いました。

ところが後日、例の同志社騒動に際して亡父が校友間に攻撃された理由の一つは、同志社大学が設立されたのにかかわらず自分の息子を官学に送ったことであつたということで、自分のわがままから

父にとんだ迷惑をかけた許すべからざる不孝者となり、真に慚愧げんきにたえなかつた次第です。このことは従来誰にも口外したこともなく、今度始めてここに公表いたす私の偽らざる告白であります。

しかし私は官学に行つて始めて私学出身の有難さを知ることができました。というのは官学は国家がまかなくてくれますが、私学は出身者が親身になつて世話をしなければならぬのです。それだけ私学出身には自分自身の学校という觀念が強いです。何の幸いも私は自分の人間形成を受けた同志社を、ほんとうに自分の母校として持つことを許されることを実に有難いと信じております。

学窓を出て社会人となつてから、たまたま約三十年間は外国に在勤することになつたものですから、母校の先生方初め同窓諸君には徹底のご無沙汰をいたしました。ただ塩瀬先生は九十歳の天寿を全うせられましたので、数年前宮津に廻つた際にお訪ね申し上げたところが、非常に御元気で、翌朝出発の際に、極力お断りしたのにかかわらず、どうしても見送ると言われてわざわざ停車場まで御出でをかたじけなうしたのが、お目にかかつた最後であります。現在、富士フィルムの小林社長夫人が先生の令嬢で、帝国ホテルの犬丸専務の夫人が令孫で、時々当地でお目にかかるたびごとに故先生を偲んでおります。

私の北寮前寮時代の寮長は周再賜君でありましたが、同君はその後永年にわたつて前橋市で女子教育に従事され、引退後昨年は叙勲を受けられました。数年前同地方に出張の際に久々に御訪ねしたところが、昔ながらの若さにこちらが驚いたくらいでありました。昔の写真類を皆焼失されたとのことでしたから、前寮生の記念写真

を一枚持参しましたら非常に喜んでくれました。

＊

第一次世界大戦後国際連盟が創設され、新渡戸稲造博士が事務次長に就任されるや、私は図らずも先生の秘書役としてまずロンドンに赴任したのは大正九年（一九一〇年）の春のことでありました。じらい瑞西ジュネーブの連盟事務局に十数年間勤めましたが、當時は史上最初の国際平和機構として各国ともその育成に一生懸命で、英のバルフォア卿、仏のブリアン首相、独のストレーゼマン首相らのお歴々が年に数回はジュネーブに現われるばかりでなく、文化方面ではベルグソン、キューリー夫人、又はアインシュタイン博士とか全世界の碩学がきら星のように現われるなど、一時は全世界は国際平和の夢に酔うている様子でありましたが、間もなくイタリアのエチオピア侵略から経済制裁が始まると、しばらくして突如として満州事変が勃発し、じらい一年有半の間、連盟で日本が袋たたきにあつたものですから、私は寢食を忘れて悪戦苦闘を重ねましたことは、それこそ一生忘れることのできない記憶です。そしていよいよ日本が連盟から脱退するや、杉村大使初め他の日本人職員は退職したのですが、脱退後も国際関係の悪化を防ぐため、日本政府は連盟と文化、人道問題の協力を継続することに決定しましたので、私ひとりだけ留任を命ぜられ、全く孤軍奮闘のやむなきに至りました。

ところがその後再び日支関係が悪化し、日本が連盟の経済制裁を受けんとする破目に立到り、私は初めて積年の宿望を遂げて、外務省に復帰を許され、本省で勤務しましたが、間もなく第二次欧州大戦が勃発しましたので私は再び欧州に送りかえされ、じらい戦時中

六年間は在欧生活を続けました。最初の二年間はフランスで勤務後、昭和十七年（一九四二年）にはヴァチカンに特派大使として派遣されました。実は四年後、帰朝して始めて知ったことですが、昭和十六年、東亜の形勢がいよいよ凶悪となって来た際、天皇陛下は万一開戦となった場合でも終戦の場合に和平工作を進める必要上、ローマ法王庁と外交関係を開きおくように、木戸内大臣に御下命になったとのことでありました（「木戸幸一日記」下巻九一四頁参照）。その結果東条内閣がイタリア政府を通じローマ法王庁と外交関係を設定し、図らずも私が派遣されることになり、終戦後まで在勤中に、実は或る日、米国側から或る僧職者を通じ非公式に和平交渉の打診をして参りました。曰く日本側はソ連を通じ和平を促進しようと思えられているが、ソ連は日露戦争に対する復讐の意味からも、満州攻略の底意あり、とうてい日本のために平和の斡旋をする意向はないと認められるから、この際至急善処せられたいとのことでした。早速東京本省へ伝達はしましたが、当時わが軍部はソ連を通じてならば和平交渉に応ずるといふ建前を取っており、既にその手続をとっておったので、東京からは何の反応のある筈もなく、私も何ら使命を果たさずして帰って来ました。これも余りまだ世間で知られていない秘話の一つかも知れません。

*

終戦と同時に外務省は開店休業の状態となり、集団退職しましたが、私は将来日本が国際連合に加盟する準備として日本国連協会を設立し、国論の啓発に努めるように外務省から命ぜられました。そしてほぼ四年間、佐藤尚武会長のお伴をして全国を遊説して歩きました。

した。やがて平和条約が締結され各国との外交関係が再開されましたので、駐伊大使として再びローマに遣わされ、在任三年を経ていよいよ外交官生活に終止符を打ち、ようやく自由の身となったと思いました。

ところが全く思いがけなくも、天皇陛下に直属する宮仕えを仰せ付かりましたのです。式部官長は、まず宮中における一切の年中行事の儀式を主宰するのであります。新年参賀から始まり、歌会始めの儀、天皇誕生日、宮中園遊会、任命式、勲章親授式とか数十にのぼる儀式を準備実行せねばなりません。次に外交関係では皇太子殿下初め皇族方の公式外国訪問の準備万端のほか、外国元首や各国要人の公式訪問に際しては国賓又は公賓として宮中における接待に当り、在日外交国に対してはその信任状捧呈から鴨猟、鮎猟等の接待には皇室を代表してこれに当るなど、体当りの相当の激職ではあります。在職十一年半になり、過去半世紀間の前任者中、私が一番長期間在職し得ましたのは、もともと式部職には三十年ないし四十年勤続のベテランが実に周到なる注意を持って働いている御蔭であつたと感謝しております。

それよりもわが皇室がいわゆる皇室外交と称せられる、隠れた大きな外交的役割を演じておられることを私は特筆したいのであります。外国の元首、皇族の相互的交歓は現に日本でその地位に在る方々でなくてはできない相談であり、各皇族も国際親善は御自身の重責と心得られ、各種の国際的接触や交際等に多忙を極めておられ、これらが国際親善のためにとれだけ大きな貢献となっているかは計り知りがないものがあります。現にかつて皇太子殿下が天皇陛下の

御名代としてフィリピンを公式訪問された際、私は親しく随行いたしました。かねて同国の対日感情の決して良くないところから、私は心ひそかに不慮の事態さえ心配したくらいでありましたのに、何ぞ図らんこの御訪問によって対日感情がガリリと好転したのであります。それには東宮両殿下の真摯な御態度等もあずかって大いに力があったと思われるのですが、これはかりに日本の首相や要人が数十人押しかけても、とうてい両殿下には叶わない事実を証明するものではありませんか。

前述の国際連盟時代には日本は世界の五大国の班に列し、その国際的地位は史上最高でありましたが、一朝、満州事変の勃発と共にが然地におちて全世界の非難攻撃の的となりました。じらいほとんど十五年間に、無謀な戦争に突入し遂に完敗を喫し、そのおかげで私も長年外国で実につらい思いをいたした体験上、今でも寝ても醒めても気にかかるのは、日本の国際的信用であります。

日本が過去において諸外国に対して犯した重大過誤はまだまだ充分に償われておりませんが、それは将来の日本の努力と誠意にまつ外ないとして、何よりも肝要なのは日本がその国際的信用を高めて、各国から真に尊敬され信頼される国になって欲しいのであります。今こそ心ある者がまさに国論の啓発にこれ努める時ではありませんか。

*

私は何の廻り合せか永年、外交関係にたづさわり、最近は「皇室外交」のお手伝いまでいたすことを許されましたが、私の今日あるのは全く母校のおかげであると信じております。私が同志社から賜

わったものは多々ありますが、その最たるものは国際的精神であります。同志社はいわゆるミッションスクールではありませんが、創立者の興学精神や創立の経緯から見ても極めて国際的色彩が多く、過去において国際場裡で活躍された国際人たる諸先輩が多いことは衆知の事実で、ここに同志社教育の一大特徴があつたのではないかと思ひます。

最近の学内の学生諸君の活動がいかなる傾向を帯びているかを知りませんが、最近のラグビー部のニュージールランド遠征とか、近くボート部のオリンピック出場などは近来の一大快事で、同志社の国際的活躍の一端として私は心から喜んでおります。しかるに例えば毎年の全国大学英语討論コンクールに関西学院大学とか聖心女子大学とかがほとんど毎年参加しておるのに、母校の参加者が近年ほとんど皆無であることは、私たちを非常に失望させるのであります。何も語学習得だけが国際的教育であるとは考えませんが、私の念願するところは良心的な国際人が今後続々輩出し、世界に同志社の存在を認識させることにあります。

(校友、元駐伊大使・前宮内庁式部官長)

アメリカン・ボードと同志社

——ラーネッドと新島の出あい——

杉 井 六 郎

アメリカン・ボードから派遣されて日本の宣教にあたった人びとには、その初代にあたるD・C・グリーン——かれは一八六九（明治2）年十一月三十日横浜に來航した——をはじめとして、数多くの宣教師がいる。明治草創の時期に、かれらはニューイングランドの精神を日本に移植した。日本プロテスタンティズムの一つの流れは、まさに、それに活力をえて展開した。明年はちょうどアメリカン・ボード日本宣教百年に相当する。

新島襄はほかならぬアメリカン・ボードの日本通信員であり、同志社はかれ新島を中心にして内外人の協力のもとに、アメリカン・ボードの力をえて設立された。いま、その数多くのアメリカン・ボード派遣の宣教師のなかで、五十余年を同志社教師としてすごし、アメリカン・ボードとの約束も完全に果たしたと思われるD・W・ラーネッドと新島襄との出あいを通じてボード（以下略称）と同志社という課題を考えてみよう。

ラーネッドの研究には住谷総長の労作があり（『日本経済学史の一齣』、『熊本バンド研究』付録）、同総長の発意でその分骨が若王

子同志社墓地に迎えられたのも近年のことであって、しかも、総長は近く『明治経済学の源流——ラーネッド博士の人と思想』（リベラス叢書の一つ、新書判）と題してラーネッド評伝を教文館から出版する。同志社のラーネッドに寄せる思いはいまなおあたたかなものがあるといつてよい。

ラーネッドは一八四八年、コネティカット州のカンタベリーに生まれた。父親はその土地の教会の牧師であった。かれの名はDwight Whitney Learnedであるが、Dwight家は連綿とした神学者の血統であって、有名なジョナサン・エドワードの神学を継承したテモテドワイトはイエール大学長であった。Whitney家も有数の地質・博物学者を輩出した家筋であって、かれは、まさしく信仰と学問に生きた由緒あるニューイングランドの家系に生をうけたわけである。一八七〇年イエール大学を卒業したかれは、さらにとどまることなく三年、ギリシア語を専攻してPh. D.の称号を修得した。

かれは一八七五（明治8）年十一月二十三日横浜に上陸した。當時横浜に移っていたグリーンンの家に一夜をすごしたかれは、グリー

ンの指示に従って、翌日神戸に直行し、翌七六年四月一日以降京都に居を定めた。

かれの同志社における生活は、以後、一九二八（昭和三）年九月十五日神戸港を解纜してアメリカに帰るまで、五十二年の長きにわたった。新島に配するに熱情真摯な J・D・デビス、泰山のように動かす学問を奨めたラーネッドは同志社の根基をつくる妙なる配剤であった。

*

ラーネッドが同志社に赴任し、新島と業をともしようになつた経緯は、いままで涉猟した限りの文書では、デビス、M・L・ゴルドン、J・C・ベリー、T・テイラー、さらにグリーンらの場合とは相違する。かれらは新島とかれの帰国以前に、すでに、その抱負を語りあい、あるいはその手紙を受けとつて、その意向を知りようになつてしたが、ラーネッドの場合には、そのような経過を知る史料は寡聞にして知らない。

ラーネッドが同志社を去るに当つて、したがつて、まったく後年の追懐の形で同志社校友同窓に送つたメッセージにつきのような述懐がある。

一八七五年六月二十三日、私はボードの幹事にあてて海外ミッションスクールで教育に当りたい希望を述べた。しかし、それまで、日本に同志社をたてるというプランはまったく知らなかつたし、また、ボードの幹事も知りあいの方ではなかつた。しかし、ボードがちょうどその頃日本に教師を一人派遣しようとしていたし、ボードのコミッショナーのなかに、私をいくぶん知っている人

があつて、私の志願はかなえられた。しかし、私は日本のどこかで先生をするという以外は詳しいことは何もわからず、しかも、その決定をくだしたボードの方々とも、ほとんどお目にかかることがなかつた。（To graduates of Doshisha・同志社校友同窓会報ラルネッド博士送別記念誌・昭三・抄訳）

その後のラーネッド同志社就職の記述が、見えない神の手によつて導かれたという叙述のうまれる理由はここにあるようである。しかし、さきに述べたように、ラーネッドはジョン・ナサン・エドワードを頂点とする神学系譜上の一人に数えられるから、今後の文書涉猟のいかんによつては、さらにその経緯を明らかにすることが可能である。

現在、ハーバード大学ホートン文書館で私が見ることのできたその間の経過を知る最初のラーネッド書簡は、一八七五年七月十四日付ミズリー州キダーからボードの N・G・クラークに宛てたものである。

昨日、九日付のご親切な手紙をうけとりました。私は一人では何もできませんが、神の冥助によつて日本での伝道事業を務めようと思つている。私はちょうど一週間前教師に任命され、同時に Florence H. Learned と結婚しました。私は来週ここを出立し、月末にはニューヨークに赴くことになると思ふ。そしてあなたと言われる集会に出席したいと思つている。

前述のように、かれの後年の記憶が正しいとすると、六月二十三日にボストンに出されたかれの海外伝道の志願は、七月九日には決定をみていたことが知られる。しかし、それは同志社における教育

・伝道を指定されたものではなかった。しかし、そこには、謙虚でしかも自信に溢れたかれの海外伝道への態度が見られる。

二十一日の航海をおえて、当時横浜に移っていたグリーン宅で神戸・京都からの招きを手にしたかれら夫婦は、翌日午後神戸に向って出発した（十一月二十四日付）。

「私はこの国がすばらしく気に入りました。当地（神戸）における伝道活動を見るにつけ、私自身もはやくはじめたいと思います。（十二月二十三日付書簡抄）」これは深慮寡黙の称をうけたラーネッドとしては、まさに少壮の英気が溢れる言葉といわねばなるまい。かれはボード宛に神戸からこの第一信を投函して間もなく京都にデピスを訪れている。堀貞一の回想によると、ラーネッドの来洛はその年の暮であって、堀は京都でラーネッドを迎えたと述べているが（前掲校友同窓会報）、かれは神戸からの第二信（一八七六年一月二十二日付）のなかで、「京都のデピスのところにちょっと出かけた。（中略）京都を訪問したいへん楽しかった。実は新島とお八重さんの結婚式に出席したのです」といつている。結婚式は一月三日デピスの仮寓で、かれの司式のもとに行なわれたから、ラーネッド夫婦は、あるいはクリスマス前から京都に入り、新島の挙式に列席し、したがって、新島とラーネッドの出あいは、一八七五年十二月という堀の回想が正しいかもしれない。しかし、さきの第一信では、新島のことには何も触れず、第二信でも、挙式に列席した喜びだけで、新島ならびに当時の同志社に関する印象はなにごと述べていない。しかも、神戸でのクリスマス行事をはさんでいる時期だけに、両人の出あいはあるいは、一八七六（明治9）年早々の新島挙式の

際であったと考えるのが妥当であろう。両人の出あいに関する時日の考証に墮したきらいはあるが、要はラーネッドの書簡には、はっきりとした新島像に関する記述がなく、せいぜい、挙式に自己同一性を認めたとしか思えない感想におわっているからである

さて、かれの三月十八日付の書簡によると、その十五日付で、三年間「新島氏の学校」で教師として京都に居留する申請の許可が、ようやく、W・テラー一家とともに交付されたといっている。かれがボード宛の書簡に、同志社をよんで「新島氏の学校」といつているのも、これが最初である。

いよいよ四月一日京都入りしたかれは、「この大きな都市でキリストのために伝道することが、われわれに与えられた特権」であると喜び、学校に関しては、「学期は先週はじまった。毎朝二時間数学を教える、私は生徒の風采がたいへん好きだ」と四月十四日付の書簡で初発の意気込みを報じている。かれは授業に精魂をかたむけ、「しらべにだいたい時間がかかり、午前中一時間半、午後二、三時間を要するが、規則正しくこれをやるのは楽しいことである」と、ゆるがせにしない学究肌の性格をむきだしにして、四月二十九日付の書簡で述べている。

さて、周知のように、ボードと同志社との間には、当初からつきのような見解の対立があった。第一はボード寄付金の性格論であり、第二は教育機関の水準・目標に関するものであった。第一の問題については、青山霞村の『同志社裏面史』に要を得た記述があり、『蘇峰自伝』にも、在学当初の印象が見られる。蘇峰の印象は正鶴であって、事実、創設当初の同志社の記録には、ボードと同志社との間

の關係を明らかにする正式の會計帳簿その他の財産文献は見当らない。したがって、それは寄付金が宣教師を通して土地購入その他必要な経費として支出されていたことを示している。新島の手控への記録にも、当時支払資金として支出された資金の残額はラーネッドに返納されていることが察せられる〔同志社九十年小史〕三二ページ。ラーネッドの書簡に土地購入や資金の支出から当然うまれるその所有権、管理権に関する報告が取りあげられる理由は、上述のことと由来していると思ふべきである。第二の争点は伝道師養成学校か総合大学制かの問題である。事実ボード側の了解は Kyoto Training School であつたが、ラーネッドの書簡には從來意外に看過されてきた初期同志社の性格を伝える記事が見出される。

いまこうしたボードと同志社の問題を検討してみる上で、七月十四日付のラーネッドの書簡は意味が深い。それは、今出川の新校舎の建築が進捗中のことであるが、「学校の Proprietor は新島氏と山本氏、さらに三教会のそれぞれからの各一名の代表者によって構成される結社の名において維持されている。すべての不動産は名義上日本人が所有するものである。これはもっともよい方法であり、われわれはまったく不安はない」といつている。

これははしなくも第一、第二の争点に関するきわめて重大な報告である。すなわち、この書簡に見られる三教会からの代表各一名については、具体的な教会名および代表者名をあげていないが、これは同志社記事（明治9・6・28の条）に見られる神戸公会今村謙吉、三田公会沢茂吉、大阪公会前神醇一を「社の議員」に加えたところのに相当する。同志社が撰津第一公会（神戸）、第二公会（大阪梅本

町）、第三公会（三田）の代表を加えて構成された事実は從來意外に検討されていない。ラーネッドの書簡に見られるこの指摘は初期同志社の性格究明の上できわめて大切で、これは同志社がボード伝道事業の一核を形成する伝道師養成学校とすることに関連する。一方名義上の所有権に関しては、この春らしい宣教師間で紛糾していた問題であつたが、ラーネッドは十月十六日付の書簡で、「一カ月前からわれわれの学校に関して、宣教師の一部にもたれていた不安は、私の思うところでは、ほとんど落着いた。」ある宣教師の「学校は名義上日本人経営者によるというが、かれらの財産としては手におえない大きいものと考えられる」という危惧に、ラーネッドが「これはある誤解にもとづくものであり、現実には立脚しない意見だ。われわれは日本人が名義人の所有者であつても不便はない。とくに、新島はすぐれて謙遜な人柄である」と意見を述べている。

これはラーネッドの新島批評の最初のものであつて、新島の人物に信頼し、かれに不安と不満を覚えず、むしろ宣教師の立場からする種々の行き違いを新島が謙虚に処理して行く人として委託する形がとられている。かれの新島像は来日らしい一年の間に、同志社をめぐって形成されてゆく。その「すぐれて謙遜な人柄」は、翌一八七七年四月二十七日の同志社経営に関するかれの政府宛弁明書で、アメリカから独立した「すぐれてナショナルリステイックな人」の面を見せることは周知のことである。

ラーネッドと新島との間に見られる双方の姿は明治初期日米文化交流のスタートにおける問題点の縮図であり、それは、現代の日本にも生きている課題であるといえよう。

（人文科学研究所研究員）

アメリカにおける新島精神

オーテス・ケーリー

ここ数年前から同志社九十周年記念事業の一部として「新島襄全集」を完成し発行する計画がすすめられてきた。それがたやすい仕事でないことは、それに手をつけ始めてからわかることなのである。日本では全集がよく出され、この面では世界のどの国にも負けないのではないかと思う。地元の日本人の全集だけでなく、文学で有名な他の国の文人のものでさえ出すのである。説明できないほど、感心することである。

ところで、新島先生はいわゆる文人とは言いにくいし、筆で食べていった人ではない。筆を生かした人であることは間違いない。四十七才で早くもこの世を去ったのであるが、しょっちゅう筆を走らせていた。しかしそれはほとんどいつも同志社のためであった。書簡、報告書、日記、説教、講演、メモ、いろいろとあるが、この中で一番光るのは書簡であろう。新島先生の人柄と関心がいきいきとページから飛び出てくるような感じがする時もあるぐらいだ。

「新島襄全集」は少なくとも十巻にわたるものとなるであろう。そのうち二巻は英語のもので、そのうち太い方が書簡で、もう一方が日記、説教、奨励のアウトライン、作文(“My Younger Days”)を含む)、レポート、その他となる。新島先生は生涯のうち、ちょうど五分の一ぐらいの期間を米欧で過したので、十巻のうち二巻が英語であるのは、ある意味でちょうど当たっているともいえるだろうが、やはり成人してからの計算でいくと日本語の方が多いことになるのである。これも、ますます同志社に身を没頭して、それを育てる意味で当然であろう。なにしろ相当な範囲にわたるほう大な数のものが残されている。

これらの新島資料は今まであまりにも大事にされてきたので、實際何点あるかということさえわかりにくかった。というのには、戦前・戦時中・戦後にかけて、だんだん現われてきたものも少なくなかったからである。今でもどこどこから新島先生のものが見られるのである。日本語で書かれたものに関しては森中章光氏と、故田中良一氏の努力に負うところが非常に大きい。



私もここ二十年、ニュー・イングランドと日本の歴史的精神的関係に関心をもったので、いろいろと探り始めたのであった。なんといつてもこれは新島先生とアーモスト大学をもとにして考えざるをえなかった。ニュー・イングランドのビュリータニズムと明治の、徳川時代からの精神的遺産となるとの武士の心や堅さは相通するところがあって、この関係を解きあかすには新島先生が重大なケースとなってくるのである。そしてそれはもちろん新島先生が残した資料からしか得ることができないのである。

私が喜んでアメリカに散らばっている新島先生の英語の書簡のあと拾いに出かけたのは、十何年前のことだった。たとえばまず、アーモスト大学にあるものを全部まとめてコピーをとったりしていた。ちょうど十五年前にアーモスト大学の総長、チャールズ・W・コール博士が、現職のアーモスト大学総長としてはじめて同志社を訪問することになったときに、それらの十通の写真のコピーを同志社への贈り物として贈呈するよう提案した。これは全部シーリー先生かシーリー家宛のもので、学生時代、アンドーヴァー神学校時代、または帰国して同志社を建てたり、二度目の外遊の、亡くなられる少し前のものまでも入っている。きれいに整本されて同志社に保存されているが、おもしろいことに順序が狂っている。というのは、きれいに撮ってある写真だが、当時の達筆な先生の「5」と「8」という数字をたしか間違えたものと記憶している。なにしろ一通り揃っている。アメリカでもいろいろ今まで知られていなかっ

た書簡が現われることもあるが、去年、もう二通シーリー家宛のものが出てきた。これはシーリー博士の孫であって、アーモスト卒業後、ハーヴァード大学の教授を経て、メイン州のアーモスト大学と同じリベラル・アーツの大学であるコルビー・カレッジの総長を二十年近くつとめたジュリアス・シーリー・ビックスラー博士(長年アーモスト大学の理事をつとめ、数年前同志社に元気な姿を見せたことがある)の掘り出し物である。たしかビックスラー博士の叔父に当るところのシーリー家の末っ子のウィリーに新島先生が当てた手紙である。あまりたいしたことは書いてないけれど、兄貴ぶって、身体に気をつけろと注意している。病氣療養中のウィリーへの励ましの言葉である。

三

一番数多い新島先生の書簡のかたまりは、ハーディー家に宛てたものに違いない。これは A. S. Hardy の *The Life and Letters of Joseph Hardy Neesima, Cambridge, Massachusetts, 1891* に多く出ているのであって、私はこの原本を十数年追っているのである。つまりここには一三五通が引用されているので、それも完全なものであればよいのだが、部分的なものもあるので困る。というのは原本がどうしてもまだみつからないので、A・S・ハーディーの選択によってしか読むことができないからである。新島先生が亡くなった翌年の一八九一年に A・S・ハーディーが選んだ部分と、七十何年後に私たちが全集として欲しい部分とは相違があるに違いない。ハーディーの名前をとって自分のミドル・ネームとした新島

先生は、当然ハーディー家との伝達が一番多かったに違いないが、私はこれらの手紙のかたまりがいまだどこかに残っていると考える。つまり二十余年にわたり、自分の親のように思つて新島先生が書いた手紙は、一八九一年に残つていたことはもちろん、それ以後捨てられているとは考えられない。ハーディー家のだれかの屋根裏にいわゆるみかん箱一杯のこの新島先生の手紙があるといまだに信じている。しかし、ハーディー家の子孫を片っぱしから調べ始めたのは十年前のことである。それに一番協力してくれたのは、A・S・ハーディーの孫の Geston Hardy 氏（最近同志社に元気な姿を見せ“Wild Rover”号の油絵をアームスト大学のプリンプトン総長をわずらわして同志社の九十周年に借り出すことができるようにしてくれた）であったが、どうしてもその手紙のかたまりの行方がわからないのである。そのうちにそれが出てくることを期待しかつ信じている。

新島先生の自筆の英文として残っている大きい書簡のかたまりの一つは、アンドーヴァー時代に世話になつた Miss Mary E. Hildan へ宛てた五十通近くの手紙である。これは部分的には発表されているが、全文としてはまだ陽の目を見ていない。ミス・ヒドンは最初に新島先生の英語をみがいてくれた人なので、その恩を感じたせいか、ずっと身体があまり丈夫でなかつた彼女に次々といろんな家庭的な連絡をしたのであつた。これらの手紙はあまり史料的に大事だとは言いがたいが、アームスト、アンドーヴァーや岩倉使節について行つた当時の先生のことを内面的に知らせてくれるのである。ミス・ヒドンはこれらを一八九二年まで大事にとつておいて、

そのうちに T. H. Page 氏に渡し、ページ博士はそのうちにアンドーヴァー神学校の理事長になり、その学長の V. Dabney 博士の手を経てアンドーヴァーに寄贈されることになった。これらの手紙のコンディションは非常によく、新島先生の筆跡は非常に光っている。いちばん問題にしなければならぬ新島先生の英語の書簡はアメリカン・ボードに送つた二十九通のそれである。これはアメリカン・ボード派遣の宣教師としての申し込みの手続きをはじめ、同志社を創立しいろいろ苦難を経て大学設立の趣旨や、アメリカの協力者の多大な寄付の指導や願いの綿密な事務的なことまでを含む。同志社を創立してから十年たつてから、身体を休めるため外遊した様子もよく出ている。

これらのものは有名なアメリカン・ボードのアーカイヴズに残つていた。その後アメリカン・ボードはハーヴァード大学との取り決めで、それを同大学の二等資料のみを扱う Houghton Library に保管してもらふことにした。これらの二十九通はどういうことか百通余りという噂になつたこともあつた。たぶん、百数ページの誤りだと私は想像する。前にとつた『読本』の原稿を、この春帰米していた時にわからない点をもう一度確かめるチャンスを与えられた。十年前にみた実物と今年みた実物とでは、もう既にちぎれかかつていて、確かめたいところがすり切れてなくなつていた箇所もあつたくらいである。しかし、さいわい一箇所を除いて全部を確かめることができたのは何よりもさいわいであつた。

四年前に私が三回目の同志社からのサバティカル・イヤー（一年間の研究休暇）をいただいで、エール大学で勉強していた時、全くの変な偶然にひっかかった。親友のA・E・マシユウズ氏（もと同志社理事）もちょうどその頃帰っていたので、彼のところへそのうち一家をつれて週末を遊びに行った。彼は一階に行きわたっているアパートに住んでいたのだが、その二階のアパートに、その家の持ち主のおばあさんがいた。



新島先生のサイン

ぜひ会わせたいというので話に行ったら、江戸時代臭い焼き物を大事そうに出してみせてくれた。新島先生から先祖がもらった物だという。いろいろ聞き出してみると、そのおばあさんの祖父が船長であり、百年前の太平洋航路に出ていたそう。だんだん聞いてみるとその船長はベルリン号のキャプテンであり、新島先生をのせたセーヴォリー船長であったことがわかった。新島先生は瀬戸物をお礼かたがたその家に送ったようだったが、私はしつこ

く手紙はないかと聞いた。あるかもしれないという答で探してもらい、ついにみつかった。それをそっくりもらって来た。喜んで寄贈したいというこのおばあさんの気持もうれしかったが、逆にコピーを作って送り返しておいた。確か二通であったがお礼じみた手紙で内容はそう驚かすほどのことはない。

新島先生はアーモスト大学へ行く前に、アンドーヴァーの名門高校であるフィリップス・アカデミーで勉強した。十年前にもここをわずらわせたが、今年ももう一度念を押しに行ったら、前は一通しかなかったのだが今度は登録時期に提出した先生のサインや日附のものをもつけた。今頃はヘボン式ローマ字というものがあるが、この頃の先生は新島式で通さざるを得なかったようだ。写真を見るとわかるが、「新」を「Nee」とし、「島」を「Sima」とし、これらをハイフンでつないだのを当時の資料は示している。一番最初は先生はハイフンもなしで大文字のSで自分の名を示していたのだが、だんだんハイフンが入ってき、そのうちにつないでしまつてSの大文字がしやがんで一つになってしまった。いつも思うことだが、この独特の「Neesima」というスペルは新島先生の多少上州がかったところの「シ」が「ス」とつながるのを示しているのではないかと考える。日本にはまだ先生の英文の資料のかたまりがあるが、アメリカにおいてのものは私の調べたかぎりではこの程度である。しかしせっかくなの全集が出る以上、この際できるだけそれが全面的にのることを希望してやまない。特にあの重大なハーディー家のものが出てくると何よりものさいわいである。なお、アメリカの学術的な諸雑誌に連絡をとり、頼んでいる次第である。

（文学部教授・米岡文化史）